

隠れた魅力

本町の隠れた名所・名物・歴史に
スポットを当てました
あなたはこれらを知っていますか？

とも
【1】 時を経て、灯り始めた

ホタルの光

「ホタルが出た」という情報提供を受け、現地を取材した6月下旬。竹やぶから小川のほとりまで、数十匹のホタルがあわい光を放っていた。草むらでは1匹のホタルが、仲間を待つかのように明滅を繰り返していた。



ホタルを通して伝えたい「自然」の貴さ 7年ごとの努力が実を結ぶ

諦めずに何度も挑戦した

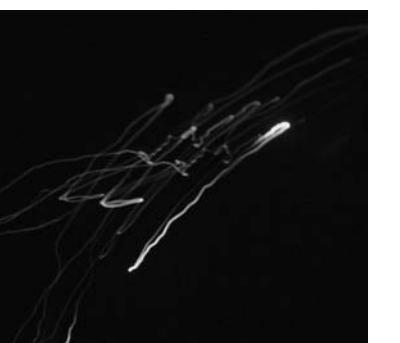
「昔は捕まえるほどたくさんホタルがいて、家の中にまで入ってきてちゃうくらいだったんだよ。今はめっきり見なくなっちゃったけどねえ…。こうやってたくさん飛んでいるのを見ると、昔を思い出すようで懐かしいね…。」

6月21日の夜、藤川の「やまめの里・てんぐ邑」を訪れたお母さんは、ホタルが飛び交う様子を見つめながら、小さな声でつぶやいた。

◆日頃からてんぐ邑の管理をする中村衛さん。「ヤマメが養殖できるくらいきれいな水なんだから、きっとホタルも育ってくれると思った」と話した。



やまめの里・てんぐ邑…住民有志7人がつくった憩いの場所。手前の小川がホタルの発生地。向こうに見えるのが炭焼き小屋と集会施設。その奥にヤマメの養殖場がある。



藤川と徳山の境にある万世橋を藤川に向かつて渡り、突き当たりを左に折れて旧道を進んだその先に「やまめの里・てんぐ邑」はある。地域住民7人によるまちづくり有志の会が、11年ほど前につくった憩いの場所だ。

ある日、ヤマメの養殖場から流れ出る小川の水を見て、グループの一員である中村衛さんは思い付いた。

「ヤマメを養殖できるくらいきれいな水なんだから、ホタルも育つんじゃないかな…。最初の挑戦は今から7年ほど前になる。ホタルの餌となるカワニナを別の場所で採取して、この小川に放流した。

「最初は、カワニナが定着し難いなあ…くらいの気持ちでした。でも次の年、(カワニナが)全くいなくなってしまったんですよ。原因は今も分からず。だめだつたのかと諦めかけていたんです」。

するとさらに次の年、衛さんの思いが通じたのか、びっくりするほどカワニナが増えたという。衛さんはすぐに当時の徳山區長・山下忠之さんに連絡を取った。

「1ミリくらいのホタルの幼虫約100匹を譲り受けました。徳山では『ときどんの池』周辺で、熱心にホタルの飼育をしていましたから、ちよくちよく情報交換していましたね。ホタルが育つ確認はありましたでしたが、とにかくやつてみようと小川に放しました」。

残念ながら、この時の幼虫は定着しなかったそう。その後も次の年も、ホタルは現れなかつたのだ。幼虫が小さ

かったことや気象条件なども影響したのかも知れない。「とても残念に思つていたんですが、それだけでは終わらなかつたんですね。山下さんから再び連絡があつたんです。それが3年前。『あまたた幼虫があるけど欲しいか』と言われてくれたんです。そこで譲り受けた幼虫は、前回よりも大きなものでした。それを見て、これならいるかもしれない、今度こそは…と期待を込めて、幼虫を小川に放しました」。

「最初は、カワニナ科に分類される巻き貝の一種。淡水に棲み細長い形状。ホタル幼虫の餌として知られる。」

この活動に取り組んでいる。ある日、ヤマメの養殖場から流れ出る小川の水を見て、グループの一員である中村衛さんは思い付いた。

「ヤマメを養殖できるくらいきれいな水なんだから、ホタルも育つんじゃないかな…。最初の挑戦は今から7年ほど前になる。ホタルの餌となるカワニナを別の場所で採取して、この小川に放流した。